
タ・ケ・ル

高遠響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タ・ケ・ル

【Nコード】

N1190Y

【作者名】

高遠響

【あらすじ】

タケル小学校6年生。サッカー好きの勉強嫌い。なんてことはない少年だが、彼には特殊な能力があった。彼はテレパシスト。親友のトーマだけがそれを知っている。

ある日タケルは琴音という美少女と出会う。どうやらこの美少女、訳ありのようだ……。

タケルとトーマと琴音。三人の少年少女のひと夏の冒険物語。

祭りの夜に&1 t; 1& g t;

1. 祭りの夜に

「じゃあ、お楽しみの通知表を渡すぞお！」

担任の成田先生が大声を張り上げた。途端に六年一組の教室の中は「えー」とも「ぎゃああああ」とも「はあああ」ともつかぬような子供たちの声で満ちあふれた。

「夏休みだからって浮かれて遊びまわっている場合じゃないぞお。この通知表をありがたく受け取って、夏休みの過ごし方をよく考えるようにな！」

ひょろっとしていて銀ぶち眼鏡の成田先生はにやにや笑いを浮かべている。いつもにこにこしているのはいいが、こういう時は憎たらしい。

成田先生は名簿順に名前を呼び始めた。

タケルは机の上に顎ゝあぐゝを置くと、どんよりとした顔で前を見る。

「川上タケル！ おい、タケル！」

成田先生の非情な声が飛んでくる。力行なんてすぐ回ってくるから大嫌いだ。

タケルは力なく立ちあがると、見るからに嫌そうな顔でのろのろと前に出た。

くすくすと女子の笑い声が聞こえる。

「見る前からそうがっかりするなよ。頑張ったよ、うんうん、体育はな」

成田先生は笑いながら通知表を目の前に差し出した。

「二学期は運動会があるじゃないか！ お前の華麗な走りを見せてやれ！ しっかり夏休みに鍛えとけよ。宿題をしてからだけどな」

「あゝゝゝもう！」

タケルはひったくるように通知表を受け取ると、どすどすと大股で自分の席に戻って勢いよく座った。また女子がくすくす笑う。二つ折りの通知表を少しだけ開けて、顔を突っ込むようにして見る。

「……………」

体育は全項目「よくできる」だ。これは予想通り。問題はその他だが……。

無情にも五段階のど真ん中から下がずらりと並んでいる。社会に至っては全ての項目が一番下と来ている。予想通りと言えば、予想通りではあるのだが……。

「……まずい。これはまずい」

パタンと通知表を閉じると、机の上に置き、その上に頭を乗せた。教室のそこかしこから、タケルと同様の焦りの“声”や、嬉しそうな“声”が波のように聞こえてくる。

やった！ これでゲームソフト、ゲットだ！

わあああ、こんなの見せたら母ちゃんに殺されるかも。

やばい！ やばすぎる！！

びみよくな内容だあ……。塾でなんて言われるかなあ。

タケルはその“声”をぼんやりと聞きながら大きなため息をついた。多分俺が一番やばいんじゃない？ 心の中でそう呟く。

軽やかなチャイムが鳴り響き、教室の中のざわめきは一層大きくなった。

「なんだかんだ言っても、小学校最後の夏休みだ。皆、楽しんでこいよ。事故と病気には十分気をつけてな！ 起立、礼！」

成田先生の言葉を合図に教室のにぎやかさは最高潮に達した。

タケルはやけくそのようにカバンの中に通知表を突っ込んだ。そして勢いよく椅子を机の中に入れた。

「タケル！ どうだった？」

クラスメートがばんつと勢いよくタケルの背中を叩く。

「いってえ！」

タケルは大きさに痛がって見せた。

「骨折れた！」

「お前の骨がこれくらいで折れるか！」

友人はけらけらと笑う。

タケルは体育だけが取り柄というだけあって、それほど大柄ではないが狍犬のようにしなやかで軽やかだった。確かに背中をはたかれたくらいで骨が折れるはずもない。足も速いので、クラスの男子の中では一目置かれている。地元のサッカークラブに入っていて、レギュラーとして活躍していた。日に焼けた顔に、強い生命力を感じさせる瞳が印象的な少年だった。

「で、どうだったってば」

「聞くな……」

タケルは顔をしかめて見せた。友人はにやにや笑いながら頷いた。
「いいんじゃない？ 天はニモツを与えずって言うじゃん」

「なんだよ、それ」

「それで勉強まで出来たら、嫌われてるってこと」

「バカってことじゃねーか！」

「そうとも言うな。じゃあな！」

友人はそう言いながら走って教室を出た。その後ろ姿にタケルは苦笑いしながら手を振った。そして、教室の一番奥の席に向かって叫ぶ。

「トーマ！ 帰ろうぜ」

「うん」

自分の席で荷物をまとめていた山本冬馬、トーマはゆっくりと立ち上がる。小柄で色白で眼鏡をかけているトーマは、タケルとは対照的に、見るからに秀才といったところだ。実際、トーマの成績は恐らく学年で一番に違いないとタケルは信じている。タケルを始め、クラスの何人かの男子はわからない問題があるとトーマに教えても

らう事になっている。トーマの教え方は先生よりも上手いというのがもっぱらの評判だ。わかりやすいし、根気よく教えてくれるし、なによりもうれしいのは、自分の親のように「なんでこんなのがわからないの！」などと言わないところだ。成田先生はトーマの事をブチ孔明などと呼んでいる。ちなみに孔明というのは三国志というやたら長い物語に登場する中国の賢人である。それくらい賢いのには、それを鼻にかけることなくいつもニコニコしているところが、いい。意外な事にトーマはタケルの親友なのである。見た目も中身もまったく違うのに、しょっちゅう一緒にいるので、二人は「オセロ」とクラスメートから呼ばれていた。勿論、黒い方がタケルで白い方がトーマだ。ちなみにオセロをトーマとタケルがすると、ほとんどパーフェクトでトーマが勝つというのは言うまでもない。

「なあなあ、トーマ」

タケルは少し声をひそめる。

「天は荷物を与えずって何？」

トーマは一瞬目を見開き、それからパチパチ瞬きした。

「天は荷物って……それを言うなら『天は二物>にぶつくを与えず』だよ。秀でた才能をいくつも持つてるモンじゃないってこと」

「……やっぱりバカってことじゃねーか」

タケルが唇を突き出して不服そうにぼやくので、思わずトーマは笑いだした。

「運動神経いいって充分だと思うけど」

「どーせ俺は筋肉バカですよ。脳ミソの代わりに、カニミソが詰まってるんだい」

タケルはむくれた。

「カニミソ……って」

「高級なんだぞ、どうだ参ったか」

無意味にいはるタケルを、トーマはさりりといなす。

「……なんで高級か知ってる？ ちよっとしか入ってないからだよ」
「やっぱりバカってことじゃねーかあああ！」

タケルはトーマの肩をつかんでゆさぶった。

「あはは……ごめんごめん。帰ろ」

「おう」

二人は並んで教室を出た。

校舎の外は一瞬めまいがしそうなくらい暑い空気と日差しと、セミの声であふれている。

学校の外の道路は家へ向かう子供でいっぱいだ。皆足取りも軽く、うきうきしている。

「あゝ、やっと夏休みだよお」

タケルは太陽を見上げて伸びをした。ようやく教室に閉じ込められる時間から解放されると思うと、青空のように爽快な気分だ。タケルにとって人のたくさんいる空間に閉じ込められるという状況は拷問以外のなにものでもない。それには勉強嫌いという理由とは別に、ある特別な事情があるのだが。

「今日の夜、泊まってもいいって？」

強い日差しを避けるように黄色い帽子を目深にかぶっているトーマは少し顔を上げると眩しそうな目でタケルを見た。

「うん。母ちゃんがいいって。……それにしても大変だよな、看護師さんって」

トーマの母親である咲子はシングルマザーで、大きな病院で働いている看護師だ。夜勤が入るとトーマはよくタケルのうちに泊まる。トーマが生まれるまでは救命救急の仕事もしていたそうで、相当なやり手のようだ。今でこそ病棟勤務だが、責任の重い立場にあるようでもとても忙しい。それでもトーマにとっては尊敬すべき自慢の母であり、タケルにとっては「いつもクールでカッコいい、超イケてるおばちゃん」だ。

タケルとトーマは保育園の乳児クラスからの付き合いで、ほとんど兄弟のようなものだった。家も近いのでしょっちゅう行き来している。母親同士も仲が良い。タケルの母親、佳奈のさっぱりしたあけっぴろげな性格に、咲子は癒されるとよく言っているそうだ。お

互いに色々な相談をしたりして、今では家族ぐるみで付き合っている。

タケルの家は自営業で必ず誰かが家にいる。人の出入りが多いので、トーマを預かるくらいタケル一家にとってはなんでもない。それに佳奈はタケルと全く違う性格のトーマのことがお気に入りなのだ。いつも犬みたいに駆けずりまわっているタケルと、物静かで目立たない、とんでもなく真面目な秀才のトーマ。見ていると飽きないらしい。

「そういえば、今日の夜の高乃城《たかのしろ》祭、行ってもいいってさ」

「え、本当？」

トーマはぱっと目を輝かせた。

高乃城祭というのは高乃城市の中心にある大きな公園、高乃城址《たかのしろあと》公園で毎年開かれている祭りだ。この辺りでは唯一の夏祭りだ。この祭があつてようやく夏が来たという実感が湧く。

「トーマと一緒にだったら安心だからって」

鉄砲玉のようなタケル一人では何をするやらわからないが、トーマと一緒にだったらちゃんとブレーキをかけてくれると言ったところだ。

「うーん、夏休みっていいよな」

タケルはもう一度嬉しそうに伸びをした。

> 続く

&1 t; 2>

ただいま！ と大声で家の扉を開けると、妹のアユミがペタペタと足音を立てながら廊下を全速力で走って来た。

「にいに〜〜！」

「おお、アユ〜」

タケルは手にしていた上靴袋を放り投げて、駆け寄ってきたアユミをぎゅうつとハグした。

「なんだ、帰ってたのかあ」

ぷにぷにのほったをつんつんすると、アユミはにに〜と笑った。

妹のアユミはまだ二歳で、保育園に通っている。ふわふわの髪の毛を頭のでっぺんでチョロリンツとくくつていて、走る度にそのチョロリンがぶかぶか揺れる。やたら人懐っこい性格で、タケルを見上げる瞳からはいつも“好き好きビーム”が出ているような気がしてしょうがない。まるでハムスターかミニウサギみたいだとタケルは思っている。歳が離れているからか、タケルはこの妹が可愛くて仕方ないのだ。時々、宿題のプリントを派手に破かれたりするが、どうせ適当にしかやらないプリントである。どうってことはない。もっとも、その後、二人して母親に怒られるのだが……。

タケルはアユミをどっこいしょと抱き上げる。背中にランドセル、前に妹、なんともかさの高いことだ。

廊下の奥の扉からひょいっと父親の哲司が顔を出した。

「あれ、父ちゃん。いたの？」

「ああ。近所の仕事だから昼ご飯は家で食べようと思って。もう少ししたらまた行く」

哲司は腕の良い大工だ。口数は少なく余計な事はほとんどしゃべらないが、荒っぽい口をきくこともない。後輩の話にもよく耳を傾け、相談にも乗ったりしているようだった。そんな哲司を慕って、

家にはしょっちゅう大工仲間が出入りしている。絶大な信頼を得ているようだ。

日に焼けてがっちりした身体の、見た目はかなりいかつい男だが、意外なくらいに優しい目をしている。アユミには勿論、タケルに対しても穏やかで滅多に怒る事はない。しかし、何か悪い事をした時はどうにも逆らえない強い瞳で見据えられる。そんな時はまるで心の奥底まで見通されるような気がして、哲司の前では絶対に嘘はつけないとタケルはいつも思う。

タケルは妹を哲司に渡した。

「なんでアユミ帰ってんの？」

「今日は昼から母ちゃんが家にいるからって」

「あ、そうだった」

言われてみれば、高乃城祭に出店する町内会の準備で、近所の人何人か家に来ると言っていたような気がする。

タケルはでかい声でわめきながら台所に入った。

「あゝ、腹減った！」

台所では母親の佳奈がちょうどそうめんをゆがいていた。ショーカットで、スラリとした後ろ姿だけを見ると二人の子持ちにはとても見えない。学生の頃は陸上をしていて、県大会で好成績を収めたそうだ。タケルの運動神経の良さは自分から受け継いだのだと、時々自慢している。

佳奈はタケルの声を聞いてちらりと振りかえった。

「おかえり」

「あゝ、腹減った！」

「通知表は？」

「あゝ、腹減った！」

「返してもらったんでしょ」

「あゝ、腹減った！」

佳奈が片方の眉をつり上げて「こいつは……」という表情を浮かべる。まあ、予想通りなんだろうけど……という“つぶやき”がタ

ケルの頭の中に届く。

「あゝ、腹減った！ メシ、メシ、母ちゃん、メシ！」

タケルはわざとらしいくらい大げさに叫んだ。

佳奈はにやりと笑うと、タケルに人差し指を突きつけた。

「食事の前に見たらきつと食欲失くすような内容なんだろう。後でしっかり見せてもらうよ。覚悟しておきな」

タケルはとほほ……と頭を抱えた。

佳奈は一人で工務店と家の事をやりくりしている。男勝りでしっかり者だ。タケルの友人達の間では「細くてきれいなお母さん」などと言われているが、なんのなんの、肝っ玉母ちゃんという言葉は佳奈のためにあるのだと、哲司が時々口にするくらい、肝が据わっていて頼りがいがある。中身は男なんじゃないかと思うくらいだ。竹を割ったような性格で、裏も表もなく、とにかくさばさばしている。体育会系で鍛えられてきたからか、恐ろしく負けず嫌いだ。責任感と正義感の強さは相当で、間違っていると思ったら相手がヤクザでも注意しかねない。口うるさくてかなわない時もあるが、佳奈が一家の太陽であり、彼女がいなければ家も仕事も回らないというのは子供のタケルでもわかる。

「トーマはいつ来るの？」

佳奈はテーブルの上にそうめんを大盛りにした大皿を置きながらタケルを見た。

「六時くらいだって。家の片付けしてから来るって」

「えらいねえ。トーマは。お前も少しは自分の部屋、片付けな！」

佳奈に頭をはたかれそうになり、タケルは慌ててよける。

「明けても暮れてもサッカーサッカーって。ヘディングのしすぎでバカになったんだよ、きつと。バカにつける薬はないって言うけど、トーマの爪の垢でも煎じて飲んだら、少しはましになるかしら」

「腹壊します。……いてえ！」

べえっと舌を出した途端に佳奈に頭をはたかれた。

> 続
<

六時きつちりにトーマは川上家の前に到着した。インターホンを鳴らそうと指を伸ばした途端、玄関の扉が勢いよく開いてタケルが飛び出してきた。

「相変わらず早いね」

トーマが小さく口笛を吹き、タケルは胸をそらした。

「トーマがその角の辺りに来たくらいでわかる」

「だんだん範囲が広がってるみたいだね」

タケルには特殊な能力がある。どうやら生まれつきの力のようだった。

人の考えている事が“聞こえてくる”のだ。テレパシストというらしい。タケルにとっては当たり前のことだったが、大きくなるにつれてその力が他の人にはない、特殊なものである事がわかった。

トーマはそれこそ赤ちゃん時代から一緒にいるのでタケルのその力のことは知っていた。テレパシストという言葉を知ってタケルに教えてくれたのもトーマだ。

二人は「どれくらいの距離から“声”が聞こえるか」というのをよく試す。トーマがタケルに心の中で呼びかけながら歩いてくるのだ。そしてどの辺りで聞こえてきたかというのを調べる。

ゲーム感覚でやっているが、だんだんタケルの能力は強くなってきたというだ。聞こえ方も変わって来ていて、最初は波のように聞こえたり聞こえなかったりしていたが、最近ではかなりはっきりとした言葉で聞こえることが多い。

「ちよつとうつとしいかも……」

タケルの表情が少し曇る。

「最近、授業中に気が散ってしょうがない」

外で身体を動かしている時にはほとんど気にならないが、じつと

しているとどうしても聞こえてくるのだ。同じ教室の中にいる友人達の様々な雑念がまるでテレビかラジオの音のように、さわさわと頭の中に響いてくる。

折しも思春期にさしかかってくる年頃だ。時には聞きたくないような内容の時もある。小さい時と違って、少しずつ皆の心の中も複雑になっていくようだった。あんまり真剣に耳を傾けていると、だんだん人間不信になるような気がするの、なるべく聞かないようにしようと思うのだが、なかなかうまくいかない。耳から聞こえてくる音なら耳栓をすればいいが、こういう声はどうすれば聞こえなくなるのだろうか。その術をまだタケルは知らない。

なんでこんな力が自分にあるのだろうかと思ふ。授業に集中できないのは勉強嫌いという理由だけではないのだ。今まで役に立った事と言えば、アユミが生まれたての赤ん坊の頃、彼女が何を欲しがっているかがなんとなく伝わってきて、それを佳奈に通訳してあげるくらいだった。

今のところ、この能力をちゃんと理解してくれているのはトーマだけだった。両親にすらまだ言ったことはない。打ち明けてみようかとも思うのだが、ふんぎりがつかないのだ。素直に受け止めてくれるか、それとも「同じつくならもうちょっとマシな嘘を言え」と怒られるか、はたまた「ヘディングのしすぎでついにおかしくなったか?」と病院に連れて行かれるか……。どっちにしても、試すにはかなり勇気がある。

「……きつと何かいい方法があるよ」

トーマはタケルの肩をぽんぽんと叩いた。僕が協力するから……。そんな声がタケルの中に伝わる。トーマのあたたかい“声”が聞こえると何故かほっとする。

と、一転してトーマの顔にいたずらっ子のような笑みが浮かんだ。「ところで、どうだった? 今日は何発?」
そして楽しそうにタケルを覗き込む。

「五発。五年の三学期よりは一発少なかったな」

タケルは佳奈にはたかれた頭を大げさに撫でてみせる。痛いという程のものでもないのだが、ぽんぽん頭をはたくから余計にバカになるのだと、タケルはいつも思う。よっぽどはたきやすい頭をしているらしい。

「トーマの爪の垢でも煎じて飲めってさ！」

「お腹壊すって」

「俺も同じ事言ったら、はたかれた」

二人は顔を見合わせて笑った。

＜続く＞

&l t; 4 & g t;

夕方になって二人は自転車に乗って家を出発した。高乃城址公園までは自転車で十五分くらいだ。少し遠いが、タケルはサッカーの練習で毎週行っているので特に問題もない。

高乃城址公園の自転車置き場は既に八割くらいが埋まっている。そこに自転車を停めると二人は公園の中に入った。

公園の中央には高乃城神社があって、そこが昔の天守閣があった場所らしい。城を守るために作られていた堀の名残の池があり、その周辺は緑の豊かなビオトープになっていた。他にもサッカーや野球が出来るような広いグラウンドがあったり、遊具のある広場もある。日本庭園のようなスペースもあり、訪れる人は子供からお年寄りまで様々だ。ちなみにこの辺りの小学生は一年生の遠足でまずここに来るといのがお決まりだ。

遊歩道から神社の参道に入ると、道に沿ってずらりと露店が並んでいる。まだ辺りには日が残っているが、露店ごとに眩しいライトが灯されていて、白い光を参道に落としていた。自家発電のモーターの音が景気よく響いている。この音を聞くと、タケルは妙にそわそわしてしまう。

タケルは思いつきり鼻から息を吸い込む。綿菓子の甘い匂いがするかと思えば醤油の焦げる芳ばしい匂いがする。匂いのおもちや箱のようだ。

「いい匂い……」

トーマもくんくんと鼻を鳴らした。いか焼きのソースの匂いがいきなりお腹を刺激する。軽く夕食は取っていたがこういうのはだいたい別腹だ。

「じゃ、さっそく行きますか!」

タケルがトーマの手をぐいっと引っ張って走り出した。

神社にたどり着くにはまっすぐ歩けば五分程度だが、あっちで食

べ、こっちで立ち止まり、と寄り道ばかりしていると、鳥居の下にたどり着くのに二十分ほどかかっていた。

「そんなにいっぱい持ってたからお参りできないよ」

トーマがくすくす笑う。タケルの右手には焼きトウモロコシ、左手にはリンゴ飴とベビーカステラの袋が握られている。タケルはまずどれを片付けるべきか、真剣に悩んでいる。

「とりあえず、トウモロコシ……だよな？」

タケルはきよろきよと周りを見渡した。神社脇の木立の中にベンチが置いてあるのが見える。二人はそこへと移動した。

古びたベンチに腰をかけ、タケルはさっそくトウモロコシにかぶりついた。もりもりっという歯ごたえと醤油の味にタケルはうなる。「うーっ、うま！」

トーマは笑いながら自分の右手の袋を開け、中からタイ焼きを取りだす。

「昔はおもちとか欲しいって思ってたけど、最近は食べることにばかりだね」

「なんでこう、すぐに腹すくんだらうな？」

ピカピカ光るおもちが欲しくて駄々こねて、佳奈によく怒られていた。父親がこっそり買ってくれるのだが、そういうおもちは大抵すぐに壊れてしまう。次の日にはゴミ箱に突っ込まれることもしばしばだった。今はとにかく食べ物を腹に突っ込む方がなにも優先だ。

タケルはあっという間にトウモロコシを平らげて、醤油まみれの指をぺろっと舐めた。

「手、洗ってこよ」

「トイレこの辺にあったっけ？」

「神社のさ、手洗うヤツあるじゃん」

「お清め用だよ、あれ」

トーマが苦笑いする。神社のお清めの水で醤油のついた手を洗って罰が当たったりして。

「醤油って食い物だぜ。罰なんてあたんないって」

タケルは口をとがらせた。

二人は揃って立ちあがると神社の方へと駆け出した。

神社の中は橙色の柔らかな灯りを灯した提灯がたくさんつるされていた。遊歩道に立っている水銀灯の白い光と違って、随分と落ち着いた光だ。お参りをする人の数は結構多く、昼間の熱気の名残と人いきれで蒸し暑い。

境内の一角ではにぎやかな神楽《かぐら》が流れていて、その前でハッピ姿の青年が飛び跳ねながら踊っている。地元の伝統芸能の踊りだそう。その周りには人だかりが出来ていて、携帯やビデオを撮る人もいた。

社務所前ではお守りやおみくじを求める人が並んでいる。まだ早い時間だがそこその人出だ。夜が更ける頃にはもっと混雑してくるだろう。

二人は人の間を縫うようにしながら参道の脇にある手水屋へと向かった。

手水屋の石造りの水槽はところどころ苔が生えていて、いかにも古そう。水槽の端には色のあせた龍の彫り物があって、その口からちよろちよろと水が出ている。

タケルはベビーカーとリング飴の袋をトーマに持ってもらって、うつぶせにおいてある柄杓を取ると、龍の口から流れる水を受け、手を洗った。

後ろに一步下がった時、むぎゅっと誰かの足をふんづけた。きゅんという声が出て、タケルは思わずバランスを崩してよろめく。ふんづけた足の主と強く身体がぶつかりそのまま二人して尻もちをついた。

「ごめんなさい！」

タケルは慌てて相手を見た。

> 続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1190y/>

タ・ケ・ル

2011年11月4日10時15分発行